

## 願望のタイの前でのヲとガの交替

大江, 三郎

<https://doi.org/10.15017/2332755>

---

出版情報 : 文學研究. 70, pp.1-11, 1973-03-25. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 願望のタイの前でのヲとガの交替

大江 三 郎

次の例1—5にみる限り、願望の助動詞（形容詞型）タイの前での助詞ヲとガの交替は自由であり、また対応する文の間の意味の相違も把握しにくい。<sup>1</sup>

1. (ぼくは) 水を / が飲みたい
2. (ぼくは) ライスカレーを / が食べたい
3. (ぼくは) 映画を / が見たい
4. (ぼくは) 本を / が読みたい
5. (ぼくは) 車を / が買いたい

なお、タイに終わる文で、上の「ぼく」のように主語<sup>2</sup>は現在時制の場合常に一人称（疑問文の時は二人称）である。「…たい」は常に主語の内的、主観的願望（感情）を表わすからである。従って、このことは「…たい」に限らず、一般に内的感情を表わす形容（動）詞についていえる。6—7をみよう。

6. a. (ぼくは) 胸が苦しい  
b. ?彼は胸が苦しい  
c. 彼は胸が苦しかった  
d. 彼は胸が苦しいのだ / らしい
7. a. (ぼくは) 試験の結果が心配だ  
b. ?彼は試験の結果が心配だ  
c. 彼は試験の結果が心配だった  
d. 彼は試験の結果が心配なのだ / 心配らしい

---

（注1）助詞ヲの生成、「主題化」（topicalization または thematization）の問題は現在の問題と全く無関係ではないが、一応無視する。ただし下の例46—48では主題化の問題に若干触れる。

（注2）「ぼくは水が飲みたい」のような文はよく主語を二つ有するといわれる。実際には日本語に主語があるかどうかは問題であるが、この用語で文中のどの名詞句が指されるか明瞭な場合には、便宜的にこの用語を用いる。

話し手が第三者の 内的感情をその場で 聞き手に 伝えることには 無理がある。しかし、過去時制を使えば主語が三人称でもよくなる。過去時制が表わす過去の一時点と現在（発話）の時点との間に第三者の内的感情を知ることが可能だからである。また「…のだ」「…らしい」ということによって、話し手の判断であることが示される。従って、内的感情の、より直接的な表現「ああ水が飲みたい」「ああ胸が苦しい」では「ぼくは」が現われることはほとんどない。これに対して、より客観化された表現「ぼくは水が飲みたいんだ」「私は胸が苦しいのです」では、「ぼくは」「私は」が表現されるのがふつうであり、それが「彼は」のような三人称に置きかわってもおかしくない。このことは形容（動）詞に限らず、いわゆる完了のタに終わる動詞を含む次のような文でもふつうにみられる。

8. a. ああ疲れた / のどがかわいた
- b. ぼくは疲れているんだ / のどがかわいているんだ

ところで1—5におけるように「…たい」の前でヲとガが常に自由に交替しうるとはいえない事実がある。5の文と次の9を比較せよ。

9. a. ぼくは車を売りたい
- b. ?\* ぼくは車が売りたい

まず考えられることは、タイがつく動詞の種類（例えば「買う」対「売る」）によって、ヲ、ガ両方とれるかヲのみとれるかがきまるということである。しかしこの考えは10の文が可能であることから必ずしも正しくないといえそうである。10はa、bとも「君は何の商売がしたいですか」という問いに対する答えとして、それぞれ魚屋、八百屋、雑貨屋を開きたいという意味でいわれているなら全く正しい。

10. a. ぼくは魚 / 野菜 / 雑貨を売りたい
- b. ぼくは魚 / 野菜 / 雑貨が売りたい

しかし、10の「売る」が「商売として売る」意味であるのに9の「売る」は「お金を得るために手放す」の意味で、発音は同じでも二つの別の語であるという反論が出るかもしれない。事実、ガを用いてもおかしくない11の文では「車を売る」の「売る」が10における意味で用いられている。

11. ぼくはセールスマンとして車を / が売りたい

けれども12におけるように、9の意味で「売る」が用いられていて、しかもガが可能であるような場合がないことはない。

12. ぼくは家ではなく、まず車を / が売りたい

10, 11でガを用いてよいのに、9でそれが不可能に近いということを私は次のように説明したい。10で質問者は相手(10の話し手)が「何かの商売をしたいのだ」という前提(presupposition)をもち、それが何かを問うている。これに対して10の話し手もそれに応じて、「ぼくはあるものを売りたい」ということを前提にし、「そのものが魚/野菜/雑貨である」という主張(assertion)をしている。魚/野菜/雑貨という名詞に焦点(focus)が置かれている。11の話し手も同様に、「ぼくはセールスマンとしてあるものを売りたい」と前提し、「それが車である」と主張して車に焦点を置いている。それ故、これらの文では、ヲを用いようとガを用いようとその名詞に主アクセントが置かれ音調上のきわだちが与えられる。ところが、9の文を考えた場合、話し手がお金を手に入れるために何かを売却することを前提し、それが車であることを主張することは比較のまれで、「車を売る」全体に焦点を置く方が自然であろう。もちろん前者の場合が比較的まれだといっても、12にみられるようにそれは起こりうる。12では「家」と「車」に対比アクセントが置かれるであろう。

ここで英語の場合をいちべつしよう。次の英文では'によって文の主要強勢、音調上の中核が示される。

13. John wants to buy a *cár*.
14. John wants to *búy* a car.
15. John *wánts* to buy a car.
16. *Jóhn* wants to buy a car.

13では強勢をもちうる最後の語が文強勢を有しており、いわゆる「ノーマルな」音調型をもっている。そして a car, to buy a car, wants to buy a car, 更に John wants to buy a car. という文全体も焦点の位置になれる。これに対して14, 15, 16の音調型はノーマルでなく、それぞれ buy, wants, John に焦点が来る。例えば16では Somebody wants to buy a car. が前提され、The one who wants to buy a car is John. が主張されている。

次に17, 18は、ある特定の時における話し手の願望、意図、更には聞き手に対する遠まわしの許可要請を表わす。

17. a. 窓をしめたい                      b. ?窓がしめたい

18. a. あかりを消したい                      b. ?あかりが消したい

これらの文で助詞ガを用いるとなにか不自然な調子になる。話し手はもとより聞き手も「窓があって、それがあいている」こと、「あかりがあって、それがついている」ことを知っている。つまり、場面上、窓およびあかりの存在と状態は話し手と聞き手に共有された前提となっているから、単に「窓」と「あかり」にだけでなく「窓をしめる」「あかりを消す」に、あるいは特に「しめる」「消す」に焦点を置く方がよいわけである。上述の不自然さはやはり「焦点のずれ」から来ている。しかし、窓およびあかりがいくつかある場合、ガを用いて次のようにいうことはもちろん自然である。

19. あの窓がしめたい

20. あそのあかりが消したい

特定の窓およびあかりが選ばれて、焦点が置かれている。この場合、「あの」および「あその」が音調上のきわだちをもたされるであろう。

10以下の例は、「…たい」の前に助詞ガが現われる時、それは音調上のきわだちと結びついて焦点の位置を示すということの証拠になるように思われる。ヲをとる名詞も音調上のきわだちと結びつけば焦点の位置になれるが、常にそうである必要はない。前提と焦点の問題は Chomsky 1970 (70—79) がかなり詳細に論じ、Lakoff 1971 (260—262) が対立する立場から同じ問題を批判的に取扱った。しかし、これら理論的立場の比較や、どちらかのわくぐみを用いてのこの問題の分析をすることはここでの目的ではない。それよりも、重要なのは次の事実である。1—5の文で、名詞「水」「ライスカレー」などに音調上のきわだちを与えれば、助詞がヲであろうとガであろうと焦点になるが、音調上のきわだちを与えなくてもヲ、ガともに起こり、しかも常にガの方がふつうだと思われる。特に内的感情の直接的表現「ああ水が飲みたい」「ああライスカレーが食べたい」などのガをヲにかえて21、22のようにいうとかえって不自然になってしまう。

21. ?ああ水を飲みたい

22. ?ああライスカレーを食べたい

とにかく、よりふつうのガを有する「(ぼくは)水が飲みたい」(「水」に音調上のきわだちがない場合)などにおいても、なお、「水」が焦点であ

り、話し手は「あるものを飲みたい」ことを前提にし「それが水である」と主張するというのはいささかこっけいである。

一般的にヲよりガを好む「…たい」は、1—5におけるような「飲みたい」「食べたい」「見たい」「読みたい」「買いたい」など比較的少数であり、「使いたい」「こわしたい」「やめたい」等々となるにつれて、ガとヲの比は次第に変わりヲが圧倒的となる。また、「かたづけたい」「とりつけたい」「とりよせたい」「聞きとりたい」など比較的長い（複合）動詞＋タイではヲが支配的であると一般化していうことができる。つまり、冒頭では疑いを表明したが、焦点の位置以外では、ガをとりやすいか否かという問題は、タイがつく動詞が何かということ、更にその長さ（拍の数）をも全く度外視しては考えられないのではないかと思う。

第一の要因は動詞のなんらかの意味的性質によってある程度定義できそうに思えるが、今のところ明確なことは何もいえない。ただ次のことは指摘に価するであろう。ガを好む1—5のような文は、あるものの所有または享受が願望されていることを示す。つまり、これらの文でタイが結びつく動詞はなんらかの意味で「私」の方向への吸収、吸引を表わす。これに対して、逆に「私」から外に向っての放出、離脱を表わすような動詞がある。もちろんすべての動詞がいずれかに分類されるわけではないが、二つの動詞の意味的型は23 a, bのように図示される。

23. a. 私●←                      b. 私●→

タイ構文でガをとりやすいのは23 a型の動詞であり、23 b型の動詞はガをとりにくい。このことは「買う」対「売る」ですでに推測された（「売りたい」の前の名詞は、焦点を置かれる場合にのみガをとることがふつうであった）が、なお、次の各ペアの a, bを比較するとよく分る。a, bの文はそれぞれ意味的に対応した23 a型, b型の動詞を含む。そして、ガは aにおいては自然であるが、bではかなり不自然であるか不可能である。

24. a. お茶を / がもらいたい  
       b. 君にお茶を / ?\* が上げたい
25. a. 本を / が借りたい  
       b. 君に本?を / \* が貸したい<sup>3</sup>
26. a. 英会話を / が習いたい

(注3) 「君に本を貸して上げたい」とするのが一番よい。

- b. 英会話を / ? \* が教えたい
27. a. 理由を / が知りたい  
b. みんなに理由を / \* がしらせたい
28. a. 真相を / が聞きたい  
b. 真相を / \* が話したい<sup>4</sup>

これに関連して思い出されるのは「(ぼくは) ——がほしい」の構文である。少くとも標準語では「ほしい」の前はガでなければならない。「ほしい」はあるものの所有、享受がまだ実現されていないことを前提し、その実現の願望を主張する。事実、上の1, 2, 5の文は「ほしい」を用いて29のようにいっても意味的にそれほど大きな開きはしない。

29. 水 / ライスカレー / 車がほしい

以上の考察に立つと、例えば「ぼくは水が飲みたい」で「水」は「飲みたい」の対象物として述べられており、「ぼくは水を飲みたい」で「水」は「飲む」だけの対象物として述べられているという説明が当を得たものと思われてくる。この二通りの意味的關係は概略〔ミズガ〕〔ノミ〕〔タイ〕〕と〔〔ミズヲ〕〔ノミ〕〕〔タイ〕〕というふうに表示することができよう。願望の表現をタイのみにかけるよりはノミタイのように…タイ全体にかける方が強く感じられる。21, 22で述べたように、感情の直接的表現の場合、ヲよりガの方が自然なのはそのためであろう。一般に、〔N-o V〕<sup>5</sup> という句(例: 水を飲む)で、Nをこの句からはずされれば N-ga になり、はずされなければ N-o のままである。ガが焦点と結びつきやすい事実はこのことと決して無関係でないことは容易に理解できよう。焦点

(注4) 次のA, Bでガを用いることは不自然でないが、動詞は23 a型とはいいい難い。特にBの動詞は23 b型であるときえ考えられる。

A. 詩を / が書きたい

B. なんとかしてきれいな声を / が出したい。

しかし、これらの文で、「私」がまだ存在していない「詩」および「きれいな声」を作り出し、ある意味では「所有する」ことを願っていることが含意される。従ってタイの前でのガの生起を動詞の意味的性質だけからは説明できない場合もある。あとで述べることから明らかなように、A, Bは「私が詩を書く」「私がきれいな声を出す」のような文を基底に有すると思われる。これら基底のうめこみ文はそれぞれ「私が詩の作者になる」「私がきれいな声の所有者になる」を含意し、うめこみ文全体が23 a型の意味を表わすといえそうである。

(注5) N(oun)=名詞 V(erb)=動詞

を置くことによって、さもなければ句からはずされにくい名詞でも、その遊離が促進されるといえる。以下、更に、関連したいくつかの興味深い例を検討する。

トルという発音の動詞は種々の意味を有する。30でトルは「つかまえる」を意味するが、これは1—5および24—28のaの動詞と同じく23a型で、ヲ、ガともに起こりうるがガの方がふつうであろう。

30. かぶとむしを / がとりたい

31で、同じ発音の動詞は「除去する」を意味し、全文はある特定の時に庭の除草をしようという意図を表わしていると思われるが、この場合はガよりもヲの方が自然である。

31. a. 庭の草をとりたい                      b. ?庭の草がとりたい

「草をとる」で「とる」が「しみ(よごれ)をとる」における「とる」と同じ意味であると主張するのは正しいことかもしれない。しかし、「——をとる」で、「草」と「よごれ」「しみ」が選択肢となるような場面はまず考えられないであろう。「草」と「とる」はそれぞれ十分な独自の意味をもちながらも相互に固く結びついた句をなし、この句から「草」をはずすことは、32におけるようにこの名詞に特に焦点を置く場合以外は困難である。<sup>6</sup>

32. 庭の、あそこにはえている草がとりたい

32では「あそこ」が音調上のきわだちをもたされるであろう。ただし、この文で、トルは31の場合と異なり、「採集する」を意味することも多いであろう。この意味でのトルは23a型であり、焦点と結びつかなくてもガをとることができる。これは、31bの「草」を「植物」に変えたらよくなることから分る。とにかく、タイがつく動詞の意味的型のほかに、[N-o V] という句におけるNとVの結びつきの固さも、タイ構文中のガの生起に対して重要な要因である。

(注6) それに対して「かぶとむしをとる」は固い句ではなく、「とんぼ」「せみ」「めだか」など多くのものが「かぶとむし」との選択肢として考えられる。この事実と、トルが23a型の動詞であることで、「かぶとむしがとりたい」と、ガが使えることが説明されるが、条件は二つともそろふ必要はないようである。「お金を / がもうけたい」でガはふつうであるが、それは「もうける」が23a型の動詞だからにほかならない。「——をもうける」で——に入るのは「お金」にほとんど限られている。つまり「お金をもうける」は固い句である



「草をとる」が固く結びついた句であるように、「写真をとる」「すもうをとる」も固い句であるということができよう。しかし両者の間には極めて大きな違いがある。「写真をとる」「すもうをとる」で、意味の重みは名詞の「写真」「すもう」の方にかかり、「とる」は意味的にかなり空虚である。特に、「すもうをとる」の「とる」の意味を、「すもう」という名詞をまじえずにいえといわれたらだれでも当惑するであろう。これらの句で名詞が意味の大部分を担っている以上、名詞をそれからはずしやすい。つまり、そうしても、意味の重要部分がそっくりまとまってはずされ、あとに残るのはほとんど空虚な部分である。事実、ガを用いた33, 34の文は極めて自然である。

33. 庭の写真がとりたい

34. すもうがとりたいなあ

意味的に空虚な動詞の典型として、「する」がある。これは「——をする」として現われるが、——に入るべき名詞が意味の中心になる。この名詞を句からはずすことはやはり容易で、従って、35—38のようなガを含む文がひんばんに用いられる。

35. 英語の勉強がしたい

36. タイプの練習がしたい

37. 柔道のけいこがしたい

38. 算数の予習がしたい

「——をする」が熟するとヲが落ちて「——する」となる。また「注文する」「禁止する」のようにヲが挿入されることのほとんどないものもある。これは単一動詞とみなされるが、タイ構文においてこれが現われると、程度の差はあっても一般にヲの方がガよりもよいようである。次の39—43をみよ。

39. 英語を / が勉強したい

40. タイプを / ? が練習したい

41. 柔道を / ?? がけいこしたい

42. 算数を / ?\* が予習したい

43. この部屋への入場を / \* が禁止したい

これは明らかに上述の「長さ」の要因によるものであるが、39—43のガを含む文の自然さにはっきり差異があることから、それだけでは律しきれな

いことも確かである。

もうひとつ、タイ構文でガよりもヲを用いる方がよい場合として「入れたい」を考察する。

44. a. 行きがけにポストに手紙を入りたい  
 b. ??行きがけにポストに手紙が入りたい
45. a. バケツに水を入りたい  
 b. ?バケツに水が入りたい

ポストが紙くず、たばこの吸いがらなどを入れる場所でもあるというよう  
 な世界観を有する人は別として、ポストに入れるものは手紙にきまってい  
 る。またバケツに入れるものも原則としては水にきまっている。従って  
 「ポストに手紙を入れる」「バケツに水を入れる」という句からそれぞれ  
 名詞の「手紙」「水」をはずすことには無理がある。また、「この手紙」  
 「あのやかんの水」のように他との対比によって焦点を置きうる場合を別  
 として、単に「手紙」「水」に焦点を置くことも無理である。それ故、助  
 詞がヲであろうとガであろうと44, 45で「手紙」「水」に音調上のきわだ  
 ちを与えると文全体が不自然となる。これらの句は結局上の「草をとる」  
 と同類であるから、上の31の文で「草」に音調上のきわだちを与えるとや  
 はり不自然になることはすぐ分る。ところが同じ「入れたい」でも46では  
 ヲ、ガともに可能であるようにみえる。

46. この箱におはじきを / が入りたい

箱に入れるものとしては実に様々なものが考えられる。あるいは、「この  
 箱におはじきを入れる」は全然固い句ではないから名詞の「おはじき」を  
 これからはずすことは容易である。ただこの文では常に文音調の問題が生  
 ずるとみられる。つまり、「この」か「おはじき」かいずれかが常にきわ  
 だちを与えられるであろう。後者の場合はいうまでもなく「おはじき」が  
 焦点の位置になる。前者の場合、「この箱」が焦点を置かれる反面「おは  
 じき」は弱まって存在が前提される。従って、それぞれ、「この箱」を主  
 題化して「おはじき」にアクセントを置く47の文、「おはじき」を主題化  
 して「この」にアクセントを置く48の文に意味的に接近する。

47. この箱(に)は、おはじきを / が入りたい  
 48. おはじきはこの箱に入りたい

最後に、ここで扱った構文の基底構造は [N-ga N-o V] 型のうめこみ

文を有すると思われる。例えば

1. ぼくは水を / が飲みたい

の基底には〔**ぼくが 水を 飲む**〕といううめこみ文がある。この型のうめこみ文のヲが任意的な「ヲ→ガ変形」によって表面的にガを有するようになるというふうに変形文法は処理するであろう。このように、〔N-ga N-o V〕型のうめこみ文が「ヲ→ガ変形」を受けて生ずるとみられる構文には、他に次の三つがある。

① 能 力

49. 太郎は英語を / がかなり聞きとれる  
50. あの子は幼いのでひとりでおもちゃを / がかたづけられない  
51. この庭には蛇がいるのでこわくて草を / がとれない

② 難 易

52. ここは棚を / がとりつけやすい  
53. 九州では洋書を / がとりよせにくい  
54. このポストは手紙を / が入れにくい

③ 状 態

55. あの部屋は窓を / がしめてある  
56. この部屋は入場を / が禁止してある  
57. このバケツはまだ水を / が入れてない

次の 58, 59, 60 はそれぞれ 49, 52, 55 が基底に有するとみられる〔N-ga N-o V〕型のうめこみ文である。

58. 太郎が 英語を かなり 聞きとる  
59. ある人が ここに 棚を とりつける  
60. ある人が あの部屋の窓を しめた<sup>7</sup>

ガとヲの違いは、これら三つの構文でもタイ構文におけると同様、〔N-o V〕という句からNをはずすか否かに対応している。(一般にガの方がふつうかと思われる。)ただ、これら三構文でヲとガの交替は全く自由であり、上にみたタイ構文がこの点に関して説明を拒否するほど複雑な側面を

(注7) タイ構文を「(ぼくは) ——がほしい」と関連させて考えたように、①「能力」構文②「難易」構文③「状態」構文とそれぞれ次のものを関連させて考えるとよい。①——は——ができる②——がやさしい / むずかしい(こと)③——が

有していたのと対照的である。(タイ構文中に現われればガをとりにくいあるいはとることができないような動詞ばかりを私は49—57で故意に用いた。) <sup>8</sup> つまり, Lakoff 1970 (chapters 4 and 5) の用語を用いれば, 「ヲ→ガ変形」が「…たい」に govern される時には, 例外にのみ適用される小ルール (minor rule) であるのに, これら三構文ではそうではない。これは非常に注目すべき事実である。

また, タイ構文とこれら三つの構文でヲとガが交替するといっても, 両者の違いは意味の違いに通じている。しかし, 例えば①の能力節についてかなり精密な論証を行なった McCawley 1972 もヲとガが自由に交替するとはいっても両者の違いには全く触れていない。変形文法のどのようなわくぐみをとるにせよ, この意味的違いをどのように処理したらよいのかは重要な問題であるが, 私もまだ解決策をもっていない。ただ, 上にみたタイの特殊性とこの意味的違いの問題とを全く切り離して考えることができないことは確かであろう。

#### 参 考 文 献

- Chomsky, Noam. 1970. "Deep Structure, Surface Structure, and Semantic Interpretation," in *Studies in General and Oriental Linguistics* ed. by R. Jakobson and S. Kawamoto, Tokyo, 52—91.
- Lakoff, George. 1970. *Irregularity in Syntax*, New York.
- . 1971. "On Generative Semantics," in *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics, and Psychology* ed. by D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits, Cambridge, 232—296.
- McCawley, James D. 1972. "Notes on Japanese Potential Clauses," *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 5 (I. C. U.), 18—40.

(注8) 「状態」構文では, 次の例におけるように, ヲが不自然になる場合がある。

- A. この本にはそのことが / ? を述べてある  
 B. この学校では長髪が / ? を禁止してある  
 なお, A, Bと次のC, Dを比較せよ。  
 C. この本はそのことを / \* が述べている  
 D. この学校 (で) は長髪を / \* が禁止している